

男子部中等科・高等科

「多様性のある社会をデザインする」

高野 慎太郎

「多様性のある社会をデザインする」のコンセプトの元に、23名の中学・高校生が集い、探求を行った。一人ひとりの関心に基づき設定されたテーマは、性の多様性、釣りの社会的意義、ウルトラマン、オリンピック、共働学舎、学びの多様性など多岐にわたる。以下は、その探求の報告である。

I. 背景

本学では、国語の授業や学校行事を通して多様性のある社会のデザインに関する学びをすすめてきた。そのなかで、特に興味を持った有志生徒を中心として、「性の自分らしさを考える自由の会（別名：Over the Rainbow、自由学園地域社会を考える会など）」が組織され、学びを深めてきた。

具体的には、研修会への参加や当事者や研究者などへの聞き取り調査、また、海外の研究を翻訳して公開する作業や東久留米市の地域のイベントでのポスター発表なども実施してきた。

一方、いわゆる「社会的弱者」に対する今日の社会的な対応は、依然として厳しいものがある。例えば、本学はキリスト教主義の学校だが、国内他所のキリスト教団体から、LGBTI を批判する内容の文面が送付され、それが全国のキリスト教関係の団体にも送られていたことも判明している。

生徒たちは憤るとともに、知見を摂取するだけでなく、自分たちも社会に何か訴えることができないかと考えるようになった。「お勉強モード」から「世直しモード」へと変態した生徒たちの「情念」を背景として、「多様性のある社会をデザインする」プロジェクトを始動することとした。

II. 方法

プロジェクトのファシリテーションに当たっては「多様性に関する学び」が持つ、メタプロジェクトの側面を重視した。ここでいうメタプロジェクトとは、「多様性のある社会をデザインする」というプロジェクト内部に、「多様性のある社会をデザインする」という入れ子構造を指す(1)。

こうした学びの最大化のためには、主体的な学び、対話的な学び、社会との接続を重視する必要がある

と考え、具体的な手法として、成果物の創出と、それをもとにした社会参画を志向するプロダクティブ・ラーニング (PL) の手法を採った。最近接発達領域理論を基礎とする PL の常套として、ファシリテーター (教師) は議論の発議とスキップフォーリング (足場架け) に徹した。

III. 活動の概要

主な6つの活動について、概要を示す。

1. 意思決定に関する理論的検討

メタプロジェクトとしての本プロジェクトにおいては、意思決定プロセスの有様が重要となると考え、「多様性のある社会」には、どのような意思決定プロセスが適切かという議論からスタートした。「誰でも自由に好きなようにすべき」「みんなで決めるため、多数決がよい」などの意見が出た。

教師から「みんなで決める」の「みんな」とは、誰のことか。決定に至るプロセスをどうデザインすべきかなどの発問をした。結果、「立場が違えば意見が違う。意見が違う背景を知り合うプロセスが大事」「決定より、議論の中でおこるお互いの相互承認を重視」という意見が出たため、ハーバマス、サンステーションらの「熟議型民主主義」を紹介し、理論的に補足した。こうした議論の末、意思決定は「熟議」で行うこととなった (写真1)。



写真1 「熟議」の様子

2. 社会の制御に関する理論的検討

「何のための学問か」という問いを議論した。生徒の意見は「社会の役に立たなければ意味なし」とする立場と「役に立つか否かで、意味が変わるのはどうかと思う」の2つの立場に分かれた。

そこで、価値自由を主張したウェーバーと、「社会制御の学」としての学問を提唱し、「べき論」の産出を是としたルーマンの立場を紹介。その後、ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論を経て、本プロジェクトは、「より良い社会をつくる」という言語ゲームを営むこと、ルーマンの立場に依拠することが議決された。

3. 多様性概念に関する理論的検討

多様性概念の含意は、Unity in Diversity (多様性による統合)の語に顕著なように、「社会統合」を志向するもので、社会の分断やアノミーを指すものではない。「多様性」という言葉に関するマインドマップ作成などを通して、検討した。

4. 研究方法に関する検討

研究方法として、文献研究を踏まえたうえでのフィールドワークや社会参与を重視した。

5. 実践研究

興味に従い、プロジェクト内プロジェクトを設立し、自律的に研究を進めた。報告(とそのフィードバック)自体も研究の一環とし、その後の発展研究に繋げた。

6. 発展研究

学業報告会期間中の活動をふまえ、更なる発展研究を行っている。

IV. 実践研究の概要

本プロジェクトでは、興味関心に従い、6つのプロジェクトに分かれて実践研究を行った。以下に、概要を示す。

1. 性の自分らしさを考えるプロジェクト

本プロジェクトは、高校1、2年生の生徒8名が運営し、2017年度春から継続する表題のプロジェクトの深化を目指した。

成立以来、文献研究、地域でのプレゼンなど、旺盛な活動を行ってきたが、生徒たちは、今後の活動の方向性として、社会デザインにより照準を当てた学びの必要性を感じていた。

2017年9月に、地域のイベントで発表した生徒のコメントには以下がある。「実際に、人々の前で話を

してみると、思った以上に、LGBTに批判的だった。」

「「少子化はどうなるの?」とか、「どうしてそういう人たちのことを考えないといけないの?」と言われて、愕然とした。」「これまで、当事者の人にたくさんお話を伺ってきて、わかっていたつもりになっていたけれど、当事者の人はこういう世界を生きているのかと、改めて痛感した」。

こうした実感をもとに、学業報告期間内は、社会学や政治学的な概念の摂取を中心に、社会デザインの視点の獲得に努めた。入間市議会議員の細田智也議員や社会学者の宮台真司先生にお話を伺い、対話的に学びを深めた。そのうえで、社会学的な「効果研究」をふまえ、どのようなプレゼンテーションが効果的か、という問いを立て、別プロジェクト(ウルトラマンから考える多様性など)に対する発表方法の提案も行うことができた。

また、羽仁もと子における「靴を揃えて脱ぐ自由」と多様性概念の関連を見出し、報告会では説得的なプレゼンテーションを行うことができた。

加えて、ポスター発表では、これまでの活動の紹介や、価値観の発信だけでなく、自由に書き込める意見交流スペースを設けた。そこには、多数の意見が書き込まれた。「社会を変えたいという心意気が素敵ですね」、「高校生でこうしたことを考えるのは、素晴らしい。大学のゼミのよう」、「当事者です。自分が高校生だったときは、絶望に打ちひしがれていました。君たちの活動に希望を託して、残りの時代を生きていきます」。

課題としては、今後の活動の継続と深化があげられる。熟考の末、生徒は、報告会当日の「報告」では、「あえて結論を出さず、課題を持ち越す」という鶴見俊輔的な流儀を通した。今後の活躍で、大儀を果たしていただきたい(2)。

2. 釣りの社会的意義に関連する調査研究

釣りが大好きな高校2年生が、「釣り」と社会の接点を探った。「釣り」がいかにして可能になり、何を可能にするのか、という、一見素朴だが本質的な問いを抱いてのプロジェクト始動だった。

まずは、釣りの意義に関する先行研究を探ったが、環境教育や観光ビジネスの議論しか見当たらなかった。落胆したが、「でも、これは自分で一からやるしかないですね」と彼は語った。

気を取り直し、釣り雑誌編集部への聞き取り調査

や栃木での取材への同行、釣り用品店への取材、釣具メーカーの方への聞き取り調査など、フィールドワーク中心に切り替えて研究を進めた。終盤は、旺盛なフィールドワークで得た知見をもとに、文献研究を進め、論の骨子を作った。

成果として、釣りの「社会的意義」を検討する論文が仕上がった。具体的には、釣りにまつわる教育的意義（マナー、魚やえさに関する知識など）、産業的意義（地域経済活性化）、文化的意義（文化としての釣り）が複合的に作用する均衡点にて、釣りは持続可能性を持つとの見解に至った。

立論の骨子は、スポーツビジネスにおけるトリプルミッション理論を釣りビジネスに援用する形式をとった(3)。論としての完成度には、やや甘さが見られるものの、嬉々として彼が、「まだ、誰も言っていないことを言うことができましたよ！」と語ったように、プライオリティーを取得するという学術的醍醐味に触れられた点は意義深いであろう。外郭の広い、大変意欲的な研究がなされた。

なお、研究の様子は株式会社コスミック出版発行の『アングリングファン』誌（2018年1月号）に写真つきで掲載されている。

3. ウルトラマンから考える多様性

円谷作品が大好きな高校1年生による研究である。幼いころから円谷作品を見て育ってきた彼には、多様性のある社会を創りだす「鍵」が円谷作品にあることは、既にわかっていた。「鍵」とは「対話」である。「人と人がわかりあえないのは、わかりあおうとしないから。分かり合おうとすれば、できる」と話した彼に、社会学的な議論を読み、考えてもらった。

1つには、文化的多様性の議論である。文化的多様性には、「人種の坩堝」と「サラダボウル」の2類型がある。アメリカ社会史の教科書的には、前者から後者へと社会は「発展した」とされる。しかし、「人種の坩堝型」が、溶け合う中で新たな価値観を作り出すことを志向するのに対し、「サラダボウル」には分断が生ずる。サラダボウルに投げられたエンジンやレタスは、いくらかき混ぜられてもエンジンであり、レタスである。これを社会に置き換えるかどうか。

加えて、ロールズ流の民主主義論も参照した。社会成員に「無知のベール」をかけたときに生ずる「反

転可能性」を、民主主義社会の判定基準とする発想だ。「ぼくは男だけど、生まれ変わったら女であってもいい」と思えるには何が必要か。その鍵として、彼は「対話」に着目したわけである。

彼の口頭発表は、怪獣の写真や「ウルトラセブン」の上映を含む、大変ユニークなものとなった（写真2）。バルタン星人のスライドを示し、彼は聴衆に尋ねる。「バルタン星人は、どうして地球にきたのでしょうか」。答えは「困ってやってきた」。その後、人が森林や深海に進出したため「居場所がなくなって」生活圏に出てきた怪獣について紹介し、善／悪の境界線を自明とする先入見に揺らぎをかける。



写真2 プレゼンテーションの様子

すかさず、ウルトラセブン第8話「狙われた街」を上映。メトロン星人が、ウルトラセブン（ダン）とちやぶ台を囲んで、対話をする。メトロン星人が語る。「教えてやろう、我々は人類が互いにルールを守り、信頼しあって生きていることに目をつけたのだ。地球を壊滅させるのに暴力をふるう必要はない。人間同士の信頼感をなくせばよい。」「そうはしません、地球にはウルトラ警備隊がいるんだ」。

こうした場面を提示したあとで、「光線を放てば一発なウルトラセブンでも、対話をしています。みなさんも、異なりを理解しあうため、信頼をつくるためにも、対話をするということを忘れないください」と報告を締めくくった。

結果的に、彼の報告は大変好意的に受け止められた。「制御の学」として、大変優れた知性の使い方であったと思われる。

4. オリンピックと多様性

中等科2年生の生徒7名により運営された。彼らの研究動機は以下である。「オリンピックという平和の祭典に多様性はあるのか」、「次のオリンピックでは、LGBTに関しての決まりが変わると聞いた。いま、何が必要かを考えておこうとおもった」。

調査方法としては、オリンピックの歴史や理念などを文献研究を中心に調べると同時に、具体的なトピックをもとに熟議を行った。また、オリンピックセンターにも調査に赴いた。

彼らが特に盛り上がった議論は、競技におけるトランスジェンダーの問題である。性転換手術を受けると、筋肉やホルモンなどの身体組成が微妙に変化する。そのため、「女性」のレースに「男性」の身体が「合法的に」混合するということがありうる。これは、「公正」なのかという問いである。

実は、この話題に先立ち、2つの議論を紹介しておいた。1つは生命倫理の議論だ。身体加工技術の進歩や AI の発展により、生命倫理の分野における議論が総じて「人」とは何を指すかに関わる社会的合意形成の問題へと移り変わってきている（ハーバマスなど）ことを確認。

もう1つは、LGBT に関わる名称の問題だ。近年、LGBT のあとに Q や I といった略称符を付ける呼称が使用されているが、原理的に、差異の線引きにはきりが無い。社会的関心を引く段階では、差異の線引きは重要だが、どこかのタイミングで、メタ的な視点に立たなければ議論は立ち行かない。

先述の競技におけるトランスジェンダー問題の議論が煮詰まったあたりで、ある生徒が、「そもそも「人」の定義が揺れてるんだから、ルールを細かくしていてもきりがなくないか」と発言。その後、「じゃあ、ルールを考える「人」は誰なんだろう」「オリンピックは、何がしたいんだっけ」と、自発的な問いが進んでいった。

「オリンピックの多様性」について検討した中学2年生が出した結論は、「オリンピックはよくない」。理由は、「一位、二位…という風に人を順位付けすることで、「人は順位付けできる」ということを教えてしまうからだ」。メタポジションの取得と粘り強い問いが見られた。

5. 共働学舎の多様性

共働学舎は、本学教師だった宮嶋眞一郎氏が設立した共同体で、障害を持つ人々とともに生活する場所である。宮嶋氏は教育の使命について、「多様である故に一致するときこそ価値がある人間の生命を、可能性を見出しつづ育てるところに使命をもつ」とした(4)。本プロジェクトは高校2年生4名、中学1年生1名が運営した。当初は、実地調査を行

う予定であったが、諸般の都合で実施できなかったため、文献研究を中心にして、構造機能分析の手法に習い、共働学舎という社会に対する構造機能仮説を提示することを試みた。

6. 学びの多様性

中学3年生が運営した。学びの方法論において、多様性はどのような意味を持つか検討した。「不登校の子どもの権利宣言」を起草した彦田来留未氏など、不登校に関する知見をお持ちの方へのインタビュー等を通して探求することができた。

IV. 結びにかえて

学業報告会期間を終え、生徒は以下の感想をまとめた。「多様性は深い」(中学1年生)、「社会に働きかける」というのは、どういうことだろうと思ったが、報告会を終えて、自分も社会に働きかけることができたと思った。嬉しかった(中学2年生)、「いまの社会が良くても悪くても、社会を作るのは自分たちだ。たくさんの問いを引き受けて、これからも活動を続けていく」(高校2年生)。

「多様性による統合」とは、逆説的な現れ方をするものである。多様性を一斉講義で教え込もうとしても、伝わらない。話を聞くのが得意な人ばかりではないため、当然だ。そこで、「多様性」の名の元に、学びを最大限多様化する。すると、探求テーマこそバラバラだが、生徒たちは<多様性に関わる学び>へと齊一的に統合された。「多様である故の一致」と、宮嶋氏が喝破した通りだ。更なる探求の深まりを自他に期待して、筆を擱こう。

注

- (1) 近年、「多様性尊重」の名目で、多様性を受け入れられない人々を「排除」する傾向が問題化される。「目的のためなら手段を選ばず」とする後期密教に対し、目的が手段に内包されることを是とした「曼荼羅」的発想が、その予防線となる。
- (2) 探求の成果の一部は、2018年3月実施の「高校生マイプロジェクトアワード2017決勝戦」(NPO法人カタリバ主催、文部科学省後援)にて報告され、全国優秀賞を受賞した。
- (3) 「トリプルミッション理論」は早稲田大学教授の平田竹男氏、中村好男氏による。
- (4) 宮嶋眞一郎『共働学舎の構想』2015. NPO 法人共働学舎. P. 6